琉球大学学術リポジトリ

インドを舞台にした英語文学：シャーロット・ブロンテ、キップリング、フォースター、ラシュディー、そしてディサイ

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2007-12-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉村, 清, Yoshimura, Kiyoshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002002296

Ryudai Review of Euro-American Studies No. 47, 2003

インドを舞台にした英語文学：シャーロット・ブロンテ、キップリング、フォースター、ラシュディー、そしてディサイ

吉村　清

Charlotte Brontë

Rudyard Kipling

E. M. Forster

Salmam Rushdie

Anita Desai

2001年度発行の『欧米文化論集』第46号に「イギリス文学資料集　アフリカを舞台にした英語文学：ベイン、コンラッド、ゴーディマー、アチェベ、そしてクッツェー」と題して投稿したが、今回はイギリスの旧植民地で、「インド独立の父」と呼ばれたガンジーなどの非暴力・非服従の精神に支えられて1947年にイスラム国家東西パキスタンと分離独立を果たしたインドを舞台にした英

語文学をシャーロット・ブロンテ、R. キップリング、E. M. フォースター、S. ラシュディー、そしてA. ディサイの作品を中心に紹介し、本学科のイギリス文学科目の基本的情報として提供したい。

Charlotte Brontë (1816-55)
Jane Eyre (1847)

＜作者紹介＞

シャーロット・ブロンテは、ホワース教区の牧師の三女として生まれたが、二人の姉エミリとアンが早く病没したので事実上の長女として成長した。アイルランド系の血を引いていたためか幼児から想像力に富み、弟ブランウェルと二人の姉とともに『アングリア』『ゴンダル』などの空想物語を書いて楽しんだ。38歳のときに牧師補アーサー・ニコルズと結婚し、わずか9か月の後に風邪がもとで亡くなった。彼女の作品にはほかに『教授』『ヴィレット』『シャーリー』がある。彼女は姉二人とともにイギリス文学史上に名を連ねている特異な女流作家である。彼女たちはホワースと呼ばれる寂寥の地に孤独な生活を送りながら、異常な情熱を傾けて詩や小説を書いた。そして『ジェイン・エア』はカラ・ベルという匿名で出版されるとたちまち大きな反響をまきおこして、姉妹たちの作品発表の道を開いた記念すべき小説である。この小説は、面白い小説として今日まで広く読まれてきたばかりではなく、近代小説の先駆として重大な歴史的意義を有している。物語は19世紀に流行したロマンス形式をとっており、幻想的な怪奇小説の影響も見られるが、なによりも大きな意味を持つのはこの小説がヴィクトリア朝の保守的な文学的伝統と社会的慣習に対して明瞭な反抗の声をあげている点である。「私は鳥ではありませんから網にはかかりません。私は独立した意志を持つ自由な人間です」とロチェスターに向かって堂々というジェインの言葉には、抑圧されてきた女性の自由と地位向上を求める熱意が見られ、さらに、臆せず自分からすすんで恋心を告白する彼女の姿には、当時の社会的通念を打破して大胆に自己を主張する近代人の面影がうかがわれる。また、小説の主人公が二人とも美しくないことも、当時の小説とし

ては型破りであった。この作品には、作者の豊かでロマンティックな想像力の発露が見られるが、同時に、ジェイン・エアの生涯には作者自身の投影が著しい。孤児になったジェインの境遇には幼いときに母を失った作者の面影が見られ、ローウッド寄宿学校の陰鬱な空気はそのまま作者が幼時を過ごしたコワン・ブリッジ学園に通じるものがあり、教師生活、妻ある男に対する愛情など作者自身の体験から取材したものが多く、その後のジェインのさまざまな心理の動きは作者自身の内面的真実を伝えるものと考えられている。

＜梗概＞

この作品は直接インドを舞台にして展開するわけではないが、ヒロインのジェインが自立の道を歩む上で、19世紀イギリス女性の典型的な自己確立の問題が、非ヨーロッパ的価値観との対比の過程で構築されていくことは間違いない（正木　95)。20歳以上も年上のロチェスターはジェインをオリエント的な「人形妻」に仕立て上げようとするが、ジェインはそれに抵抗する。また、妻のあるロチェスターとの結婚を諦めた後、インドでの布教活動のためにジェインを必要とするシン・ジョンに打算的なプロポーズをされるが、彼女は最終的には拒否する。

孤児のジェイン・エアはリード家に引き取られたが、我が強く不器量なためもあって夫人や息子ジョンから冷遇され、暗い幼年時代を送る。10歳のとき彼女はブロックルハースト氏に託されてローウッド慈善学校に入れられるが、ここの施設は貧しく生徒の扱い方は非人道的で、そのうえチプスがはやる悲惨な学校であった。慈善学校にやってきたジェインを集まった寄宿生の前に立たせ、校長のブロックルハーストが以下のように彼女を紹介する。「… この少女、この子、このキリスト教国に生まれの人間は、梵天王（ブッマ）に祈りをささげ、ジャガノート（インド神話に出てくるクリシュナ神の偶像）に跪く数多くの異教徒の子よりも、さらに悪い人間だからです ——、この娘は —— 嘘つきなのです！」（上巻　115)。ここで言う「異教徒」がインドのヒンズー教徒であることは言うまでもない。「ジェインは嘘つきだ」というブロックルハーストの道徳的非難が、単にイギリスのキリスト教的社会規範に照らして行われているのではなく、その規範の埒外に置かれたインドのヒンズー教徒との対比によって補強さ

れている（正木　91)。ジェインは、生徒として6年、教師としてさらに2年をここで過ごしたあと、広告で家庭教師の職を得、任地のソーンフィールドへおもむく。

ソーンフィールド邸は森を背景にした大きな清閑な邸で、7つか8つになる生徒のアデールも素直だし、管理人のフェアファックス夫人も親切なのでジェインは安堵する。主人のロチェスターは気難しく、ごつごつした感じの醜男であるが、ジェインはときどき彼の話をきいて味わっているうちに、細くかよわかった自分の運命がしだいに大きくなり生活の空白が満たされるような気がしてくる。ロチェスターはアデールが彼の昔のフランス人の愛人セリーヌが置き去りにした私生児であり、彼はその愛人にだまされたのだとジェインに説明する。

ジェインはこの邸で幸福な日々を送るが、不気味な恐怖がいつも彼女の心を脅かしていた。夜更けにドアのところで悪魔のような笑い声をきいて飛び出してみると、ロチェスターの寝室が燃えていたり、ジャマイカから来ている客の一人であるメイスンが何者かに切りつけられたりする。

ある夏の夕、ジェインがロチェスターに対する思慕の情を打ち明けると、彼もジェインを激しく愛していたことを告げて妻になってほしいと言う。

ある日ジェインを町に伴ったロチェスターは、身分の違うジェインを自分好みの貴婦人のイメージに仕立て上げるために、ドレスと宝石を大量に買い込んで彼女に押し付けようとする（下巻　61)。ジェインは6着のドレスを2着に減らして抵抗しながら「ロチェスター氏に人形みたいな格好をさせられたのではたまったものではない」と考える。そしてそんな彼女をしつこく見つめるロチェスターの微笑を、「まるでサルタンが喜びと愛情に満ちて、黄金や宝石で美々しく飾らせた女奴隷をながめるときの微笑のようだ」とジェインは感じるのである。ジェインのそうした連想に応えるかのようにロチェスターは、「わたしは、この小さなイギリス人のお嬢さん一人を、かもしかのような優しい目と、回教の極楽の女神のような姿をした大トルコ帝国のハーレムの女全員とだってとり替えるつもりはない」と言う。東洋の後宮を引き合いに出されたこと(the eastern allusion) に傷ついたジェインは、ここで猛烈な反撃を試みる。

「私はあなたのハーレムに加わるつもりはありませんからね。私の事をそんなふうに思わないで下さい。それがあなたのお好みでしたらイスタンブールのバザールへ、さっさとどうぞ、ここでは有余ったお金の使い道にお困りのようですから、女奴隷をお好きなだけ買い込まれては如何でしょう」

「それでジェイン、私が人肉をトン単位で買い集めたり、黒い目の品定めをしている間、どうするつもりなんだ」

「宣教師になる準備をします。奴隷たちに自由を説くのです。もちろんあなたのハーレムの女たちにもね。うまく入り込んで反乱をそそのかします…。」(同　63－64)

同じ日の夕暮れ、ロチェスターはジェインに恋歌を聞かせる。その歌の終わり近くに「恋しい人が誓ってくれた…私はあなたと共に生き、あなたと共に死にましょう」(同　71) とあったのを、ジェインは聞き逃さない ——「それは一体どう言うことです。キリスト教の考えることではありませんね。私は一緒に死ぬ気なんかありませんよ、絶対に」。あれは共に生きてほしいという願いなので、死ぬだなんてとんでもないと抗議するロチェスターに、ジェインはとどめを刺す ——「そうでしょうとも。時がくれば私は死にます。それはあなたと同じです。でも私はそのときまで生き続けます。サティのようにせきたてられて死ぬのは真っ平です」。そして謝るロチェスターを尻目に、ジェインは部屋を後にする。「ロチェスターに「東洋的専制 (despotism)」のすきを与えないジェインの抵抗は見事と言うほかない。だがそれにしてもなぜ彼女の捨てぜりふに「サティ (suttee／sati 貞淑な女性を意味する) が登場するのか。

サティーといえばヒンズー教で夫に先立たれた妻が、遺体を焼く火の上に身を投げるなどして殉死する風習のことである。イギリス植民地当局によって1829年に禁止されるまで、ベンガル州だけでも毎年500件以上の例が報告されていた。自立を目指すジェインの主体は、そのような自立を奪われた東方の女たちと自らを峻別することによって構成される。奇妙なことにジェインは彼女たちの隷従を抜きにして、自己の主体性を主張することができないのである。自分をハーレムの女と比較されたときにジェインが抱く異様な屈辱感は、これを理解してはじめて説明することができる

（正木　95）

婚礼の前々日、見たこともないような吸血鬼のような女がジェインの衣装を引き裂き蝋燭をかかげてベッドの上の彼女を焼けつくように凝視しているのを見てジェインは気を失う。ロチェスターの慰めに気を取り直したジェインが婚礼に臨むと、儀式の最中に、ブリッグズと名乗る弁護士によって、新郎には既に15年前の19歳のときにジャマイカで結婚したバーサという妻があるとの異議申し立てがなされ、バーサの兄であるメイスンもそのことを証言し、その場は混乱する。やがて狂人で獣のようになったロチェスター夫人が邸の３階に隔離されていることが暴露される。ロチェスターは、自分は妻の家族と自分の家族に罠にはめられて財産目当ての結婚を強いられたと弁解する。

傷心したジェインは重婚を逃れるようとして邸を出る。放浪し飢餓に倒れそうな経験のあとで、モートン在の牧師シン・ジョンに救われ、健康を回復し、彼の紹介で学校教師の職を得る。その後、叔父ジョン・エアーの遺言により、彼女は20,000ポンドの遺産相続人になり、またシン・ジョンとその２名の妹たちがジェインのいとこにあたることが判明する。ジェインはその遺産をいとこ４名で等分することに決める（同　299）。

その後、シン・ジョンは彼女にプロポーズし、布教活動をするために一緒にインドへいかないかと提案する。

「ジェイン、わたしといっしょにインドへおいでなさい。わたしの助手として、協力者として来るのです」（同　332）「インドの学校の教師として、またインドの夫人の協力者として、あなたの協力は、わたしにとって、計り知れぬほど貴重なものでしょう ――」（同　336）

しかし、ジェインは牧師のインドでの宣教活動への理解は示し同行にも同意を示すが、愛していない彼との結婚を承諾するわけにはいかない。「ああ！もしセント・ジョンといっしょになれば、わたしは自分の半分を投げ捨ててしまうのだ。インドへ行くとしたら、それは死を早めに行くのだ。そして、インドへ行くために英国を去るあいだと、墓場へ行くためにインドを去る間の月日は、どんなふうに埋められるのだろう？」（同　337）

シン・ジョンはインドを「獰猛な蛮人」の住む異教の地として位置づけるこ

とに何の疑問も持たず、未婚の二人にとって結婚以外に生活を共にする道はないと強調するが、ジェインに対する愛の告白は皆無である。

「わたしがあなたと結婚するのでなければ、まだ30にもならぬ男のこの私が、どうして19の少女を、インドまで一緒に連れて行くことができるでしょう？永久に一緒にいて —— あるときは寂しい荒野に、あるときは獰猛な蛮人に混じって ——、しかも結婚しないでいるなどということが、どうしてできますか？」(同　345)

そんな彼の心情をジェインは容易く見抜き、結婚の形で彼に助手として服従・奉仕することで自己喪失することはナンセンスであると明言する。

「服従を期待して抵抗に出会った気むずかしい専制的な性格の（持ち主）の味わう失望。…要するに彼は、一人の男としてわたしを強制的に服従させたかったのだ」(同　348)

その後、ジェインはシン・ジョンの妹ダイアナに言う。「あの方はインドでいっしょに働く相手が欲しいという、ただそれだけの理由で、わたしに結婚を申し込んだのですわ」(同　360)。それに答えてダイアナはインド行きに断固反対する。「あんなところへ行ったら、三カ月と生きていられやしない。. . . あなたは、とても綺麗よ。それに善良だし、カルカッタで火炙りになるには、もったいないくらいだわ」

ある晩、シン・ジョンがジェインに結婚の最後の決断を迫っているとき、彼女ははるかかなたから「ジェイン！ジェイン！　ジェイン！」という霊的な呼び声を聞く。ある夏の夕方、ジェインはその霊的な呼び声に誘われてソーンフィールドを訪れるが、そこは黒い廃墟と化していた。邸は狂った妻バーサの放火で焼け落ち、彼女は屋根の上から身を投げて死に、妻を救出しようとしたロチェスターは失明し、片手のない身障者となっていた。ファーンディーンの農場で化け物のようにひっそりと暮らしていたロチェスターを訪ねたジェインは、変わらない愛の心を告げて、二人は結ばれる。邸宅の焼失により財産を失ったロチェスターの窮状を、叔父からの遺産でジェインが補い、二人の結婚の障害となっていたロチェスターの狂った妻バーサの死という、両者にとっては実に好都合な二つの出来事によって二人は晴れて結婚するのだが、作者の安易なご都

合主義的結末には疑問が残る。小説の結末では、ジェインが幸福で夫婦対等な結婚生活で10年目を迎えたこと、失明後の２年後にロチェスターの視力が回復し、二人の間に生まれた息子を抱いた彼は、その目が彼の目に似て大きくて、輝いていて、黒いことを確認すると記述されている。

Rudyard Kipling (1865-1936)
『*Kim*』(1901)

＜作者紹介＞

キプリングはインドのボンベイに生まれ、インドにおける経験に取材した小説、短編、童話、詩を書き、19世紀から20世紀初頭にかけて最も親しまれた作家である。イギリス帝国主義を肯定し、インドにおける英国軍人の行為を賛美する態度が著しく、男性的な力強さ、浪漫的雰囲気を写実的な筆で醸しだす技巧がその特徴である。1907年にはイギリス作家として初めてノーベル文学賞を得た。インドの密林、海、軍隊生活、超自然的現象などを扱った短編小説は有名であるが、長編のなかでは『キム』が最も有名であり、また傑作である。みなし子のキムはインドの陽に焼けて真っ黒に育ち、誰の目にもインド人としか見えなかったが、血は争えず、イギリス軍の秘密機関のために貢献するという冒険談である。読者は少年キムにひかれるとともに、19世紀のインドの風物に愛着を感じる。

＜梗概＞

キムの両親はアイルランド人で、父は連隊で軍旗護衛軍曹、母は軍人の娘で大佐の子守女だった。キムが生まれると間もなく母はコレラで死亡し、父は数年間幼子をかかえてさまよっていたが、阿片の中毒で死んだ。キムは、母方の叔母と名乗る混血婦人に引き取られてインドのラホールに成長した。まだ13歳の彼は、イギリス人でありながら、皮膚は陽に焼けて黒く、土地の言葉を自由に操るものの、英語のほうは抑揚のない片言だけだったので、この少年を白人と思う者はなかった。

彼は宗主国と植民地インドとのはざまに存在するのである。イギリス人とは

いえアイルランド人の軍旗護衛軍曹と子守女との間に生まれた子供であったということは、彼の出自が宗主国イギリスから見れば、半ば他者という周縁的存在であることを裏づけている。イギリスの植民地であるアイルランド出身の父親（アイルランドの独立は1921年）、それもフリーメイソンの信奉者。フリーメイソンといえば、ユダヤ人同様ヨーロッパが内部に抱えた完全なる他者。そのうえ、母親もアイルランド人で、大佐の子守女だった。

ある日、ラホールに、罪を洗い清める「矢の聖河」を求めてきたチベットのラマ僧があった。キムはこの僧とともに旅行したら冒険ができるだろうと思って弟子になり、二人で河を求める旅に出る。高僧はいたって大真面目であり、キムが敬愛する僧侶であるが、キムがいないと一人旅は心許ない。そのラホールのはずれでキムは馬商人マーバブに会って、英国軍の将校に渡すべき密書を託される。キムはマーバブが英軍のスパイ機関のメンバーであるとは知らなかった。頼まれた通りその密書を将校に渡し、物陰に隠れて様子をうかがうと、その文書は八千の英軍派遣に関する要請書であることが分かった。

ラマ僧とキムは旅を続ける。キムの星占いによると、緑の原に赤い牛が現れるとき彼の運勢は一変することになっている。ところが、キムがマベリック連隊まで来ると、連隊旗はまさしく緑の地に赤い牛であった。この連隊はかつて父が旗手をしていたところである。ここでたまたまキムが日ごろ首にかけているお守りを開いてみると、その中にキムの洗礼証明書と、子供の世話を頼む父からの依頼状が出て、キムの素性が判明する。そこでキムはラマ僧と別れる。マーバブに託された密書の事件で、キムは英軍八千の北上を知っていたので、芝居気を出して英軍の出動を予言するが誰も本気にしない。ところが翌日になるとキムの予言が的中し、八千の英軍が北上したので一同は驚く。

ラマ僧がキムの学費を送ってきたので、キムは聖ザビエル学校へ送られることになる。キムは成績がよかったが、元来教室や寄宿舎に閉じ込められていることが嫌いである。休暇になると馬商人マーバブの所へ行き、二人で旅行して危険な経験をする。マーバブはキムを英国スパイ機関のメンバーに仕立てるためにいろいろな訓練をする。休暇が終わるとキムは再び聖ザビエル学校に戻り、このようにして結局３年間の学校教育を受ける。

キムはその後またラマ僧と行動をともにすることになり、罪を洗う河を求めて旅を続ける。途上キムはインド人の有力者に会い、その人から北インドの王たちの中にはロシア人とフランス人のスパイを北境から入れている者がいることを知る。キムとラマ僧は協力して二人のスパイの荷物を奪い取り、その中から密書を抜き出す。

キムは密書を身につけて、ラマ僧と旅を続け、インドの有力者に密書を渡す。たまたま馬商人マーバブもその地にいて、一同はキムがスパイ合戦に偉大な功績があったことを賞める。政治に無関心なラマ僧には最近の騒動は何のことやらさっぱりわからない。しかし、このように密書の争奪戦で活動しているうち偶然、ラマ僧の求める河が発見された。キムが寝食の世話になっている老婦人の地所内に、罪を清める「矢の聖河」が流れていたのであった。

E. M. Forster (1879-1970)
A Passage to India (1924)

<作者紹介>

E. M.フォースターはロンドンで生まれ、ケンブリッジ大のキングズ・カレッジを卒業している。彼は1901年にギリシャとイタリアに滞在したが、この経験が彼にその後影響を与え続けた。彼はギリシャやイタリアの農夫の生活とイギリスの中流階級の堅苦しく抑圧された生活を対照化する傾向があった。ギリシャ神話とイタリアルネサンス芸術はともにマシュウ・アーノルドが「意識の自発性」と呼んだ世界にフォースターを導いてくれたが、彼のほとんどの作品は近代世界における複雑性と分裂性の真只中での個人間の関係の本質を追求するものとなっている。1903年に創刊されたリベラル派の *Independent Review* 誌の寄稿者となった。彼は1905年にイギリスの洗練された地主階級と粗野なバイタリティに満ちたイタリア人との対比をテーマにした最初の小説 *Where Angels Fear to Tread* を発表した。

ドイツで英語教師として勤め、1912年にはインドに長期滞在し、1922年には当地を短期訪問した。ブルームズベリーグループとのかかわりも長く、1946年

からは母校のキングズ・カレッジの名誉特別研究員となり、多数の海外旅行をしたが、この二つは、フォースター自身が主張するように、洗練と人間的な（普通では考えられないほどの幸福な）存在感を保証した。彼の最後の小説A *Passage to India* は1920年代初期のインドにおけるイギリス人とインド人との関係を背景として扱っているが、人間関係の可能性と限界性、将来性と危険性が複雑に交差する問題を提起している。

＜梗概＞

インドがまだイギリスの植民地（インドの独立は1947年）だったころのことである。ガンジス河にのぞむチャンドラポアという町で、ある日、インド人の医師アジズとその友人たちとの間に、イギリス人と友達になることが可能かどうか、ということが話題にのぼり、イギリスでなら可能だとしても、インドでは不可能だろう、という結論がでる。というのは治安判事のロニー・ヒースロップをはじめ、土地に住むイギリス人たちが、あまりにも支配者意識をもちすぎ、ことごとに官僚的な振る舞いにおよぶからである。ただこの町の大学で学長をしているフィールディングと、最近この町に着いたばかりの二人の婦人――ロニーの母ムーア夫人と、ロニーの婚約者アデラ・クェステッドだけは別である。彼女らはインド人に対しても偏見を持っておらず、極めて友好的である。

そこで、かねてからイギリス人と親交を希求していたアジズは、フィールディングを介して、「インドを知りたい」と念願する二人の婦人をマラバーの洞窟へ案内することになる。ところが、同行するはずのフィールディングが汽車に乗り遅れたばかりに、思いがけない事件が突発する。洞窟内の異様な雰囲気に、ムーア夫人は底知れぬ虚無感に陥り、アデラは途方もない幻覚にとらえられる。アデラは、アジズに辱めを受けそうになった、と思い込んでしまうのである。フィールディングがインド人教育の理想に掲げる個人主義（自立した個人として他の個人を理解する）は、アデラによってすでに実現されており、彼女は自立をほぼ達成した女性である。その意味で彼女の主体は、イギリス自由主義の産物なのである。その主体がインド的他者と遭遇したとき、溶解して洞窟の中での錯乱を招いたのだ（正木　100)。本当のインドを見たかったアデラにとって、これは皮肉な結末である。マラバー洞窟のこだまというインド的他者性に

よって、アデラの主体が撹乱されたのだ。その主体の撹乱を彼女は、アジズによるレイプ未遂という幻覚に置換し、自己の精神の安定を図る。そのためアジズは逮捕され、裁判にかけられる。

それを契機として、チャンドラポアではイギリス人とインド人との感情的な対立が起き、状況が険悪になる。この間、アジズの無実を信じるフィールディングは、同胞から白眼視されながらも、その釈放のために奔走する。ムーア夫人もまたアジズの無実を信じているが、なぜか彼女は、自らすすんで法廷に立って彼を弁護しようとはせず、突然帰国の途に着き、その船の中で昇天する。

その後、アデラの崩壊した主体を再生させたのも、またインドである。裁判の当日、「法廷はぎっしりと人で埋まり、それにもちろん暑かった。アデラの目に最初に止まったものは、それらの人々の中でも一番身分の低い人物 ——バンカという、天井からつるされた巨大な布製のうちわを綱で引っ張って動かしているインド人だった」。この男は、神々しいまでに美しい。だがそれ以上にアデラの心を打ったのは、周囲のできごとに対する彼の無関心であった。その超然とした姿にアデラは「自分の苦しみのせまさ」を思い知らされる。こうしていったん自己を相対化してしまうと、アデラにとって、真実のみを語るという本来の自分に戻ることは難しいことではなかった。アデラはしだいに幻覚を克服し、遂に告訴を取り下げる。いつのまにかアデラの耳からあのこだまが消えていた（正木　102)。この彼女の動向をイギリス人たちはきびしく非難し、ロニーは婚約を解消する。

しかし、ロニーとの結婚すら、最終的な決定権は彼女の手にあり、その可能性がなくなって帰国する彼女を待っているのは、なんらかの仕事と、それを始めるのに十分な資金と、志を同じくする多数の友人であった。

一方、アジズは自由の身になったものの、アデラに対する憎悪の念をぬぐいきれないばかりか、恩人ともいうべきフィールディングにむかってさえ、こう叫ばずにはいられなくなる。「たとえ5千5百年かかっても、われわれはあなたたちを駆逐する。そうだ、呪われたイギリス人どもを一人残らず海へ叩き出してしまうんだ。そうしたら、その時こそ、あなたとぼくは友だちになれるのです。」

インドへの道はない。というのも人間の権力（支配者としてのイギリス人）と人間のニーズ（被支配者としてのインド人）に間にはどうしようもない断絶があるからだ。この作品では西洋の合理的個人主義とインドの非個人主義的な神秘との間の空しい衝突が描かれている。

Anita Desai (b. 1937)
"Scholar and Gypsy" (1978)

＜作者紹介＞

アニタ・ディサイは1937年にインド北部のムソオリでベンガル人の父とドイツ人の母の間に生まれ、デリーで大学までの教育を受けた。彼女のバックグラウンドはインドを遠近の両距離から観察することができるビジョンを彼女に与えた。批評家のブルース・キングは「ディサイは男が何をするのか、女が何を感じるのかをテーマに小説を書く」と述べている。彼女の描く男たちは「学者とジプシー」のデイビッドのように手厳しくあるいは風刺的に観察・描写されているが、彼女は男性中心の社会で中流階級の女性たちがいかにその拘束やハンディに対して折り合いをつけるのか、あるいは克服するのかというモチーフを追求することを得意とする。彼女の作品は総じて危機的状況にある人生にフォーカスを置き、絶妙な語りのテクニックと完璧なスタイルでその状況を的確に描出する。「学者とジプシー」のヒロインであるパットはボンベイの酷暑と恐怖から逃れて、山々に囲まれた寒村に混雑した都会には見られない安らぎを見出すだけでなく、以前には想像したこともない内的活力と精神的生活を発見するのである。逆にボンベイでは論文作成のための調査も友人たちとの交際も手際よくこなして充実した生活をエンジョイしていた学者は、田舎の生活を激しく嫌悪する中で自分を見失ってしまう。このような二つのタイプの変化を有機的に統一する技法はディサイの成熟した作品に見られる典型的な特徴であり、喜劇と人間的限界に対する容赦ない批判を融合させた文学のなかで困難な人生についての悲劇的ビジョンを提起している。

＜梗概＞

バーモント州の高校卒業後も地元にとどまっていたパットは社会学を専門にしているロングアイランド出身のデイビッドと結婚し、その後インド研究の論文を執筆中の彼とともにボンベイに到着した。初日からボンベイの猛暑は彼女を容赦しなかった。体中汗ばみ、エネルギーも希望も失い、パットは生きているという実感を失っていた。「でもここに来る前からインドの酷暑は知っていたんだから」とデイビッドはいうが、彼女の絶望感を払拭することはできない。「ええ、暑いってことは知っていたわ」とパットは喘いだ。「でもこんなにひどい暑さだなんて。もう死ぬほどよ。半死の状態よ、いえ完全に死んだ状態よ」と彼女は愚痴る。

デイビッドは磁石のように人々を惹きつけ、やがて二人はパーティーに足しげく通うようになった。ボンベイの人々の最大の関心事はパーティーなのではとパットは思い始めた。

ボンベイの混雑、騒音、貧困、病気、汚れ、そのなかで忙しく動き回る人々のバイタリティーは彼女には不自然に感じられた。パットにとってボンベイは理性や秩序に代わって混沌と邪悪が支配する最悪の町で、パーティーから家路に向かうときの彼女は、世界中を旅するアメリカ人のイメージからは程遠い存在で、デイビッドの腕の中でまるで生ける屍同然となっていた。「ここの連中は粗野で野蛮よ、もっと洗練されているかと期待してきたのに、まだまだジャングル同然だわ」。「どういう意味なんだ？　ぼくたちが付き合っている連中はニューヨークのカクテルパーティーに行ったって気後れすることはまったくないはずだよ」と反論するデイビッド。

ある日、ますます落ち込んでゆく妻を不憫に思ってデイビッドが言った。

「ここを離れよう、デリーの方が湿気は少ないそうだし、君にもそのほうがいいだろう」

「でもあなたの論文はどうなるの？　あそこでも書けるの？」

「そう思うよ」

確かにデリーは乾燥していたが、暑いのにそんなに変わりはなく、黄砂の嵐がひどかった。パットの砂で汚れた足、針金のような髪、恐怖で引きつり細っ

た顔立ちを見てデイビッドは「気候に振り回されてはだめじゃないか」と既になくなっている優しさを装って言った。そのようなパットのせいで、彼は会うべき人々にも会えず、論文作成も進まず、なにもかも手につかなくなっていた。彼女がこれほど重荷になるとは想像もしていなかった、彼女はまちがいなく素敵な同伴者でありジプシーであるはずだったのに。

気持ちを切り替えて、パットはインドの美術と文化に興味を抱くべくニューデリーの骨董品店を歩き回ってみたが、そこの粗野で原始的な雰囲気に圧倒され吐き気に襲われた。

「あなたにとって私は十分に洗練されている女性だとは思わないわ」。パットは初めて二人のバックグラウンドの差異を口にした--以前はそんなことまったく問題にしなかったのだが。この事実は二人を恐怖に陥れた。

二人はギクシャクしてきた関係を修復するためにクル峡谷にあるマナリ村へ向かった。砂嵐は二人の乗ったバスを容赦なく襲い、ラージャスターン砂漠の黄砂を壊れた窓から多量に運んできた。デイビッドの後の席の女性は絶えず吐いていたし、前の席の子供はギャーギャーと泣き喚いていた。彼は耐えられなくなって「もうだめだ、パット、もう我慢できない」と叫んだ。「でも涼しいのよ」若々しい高めの声が返ってきた。今しゃべったのはいったい誰？　彼は振り返った。窓の外に身をのりだしてそよ風を楽しんでいる妻の生き生きした眼差しをみて驚いた。彼は理解に苦しんだ。

マナリで宿泊することになっていたホテルは山間にあり、二人は徒歩で山道を登った。「なんてこった。ここはヒッピーで一杯だ」。デイビッドは驚いた。アメリカ人、ヨーロッパ人が、このマナリで、世界の果てで、いったい何をしているのかしらとパットは思った。彼女は新鮮でひんやりした山の空気を胸いっぱい吸い込んだ。水のように彼女を清浄する空気。彼女は満足してデイビッドの腕をつかもうとしたが、彼はロックが壊れて開きっぱなしになっているスーツケースを抱えるのがやっとで、指一本さえ彼女のために差しだす余裕はなかった。

パットは山に住む人々を気に入った。彼らは「自立していて」彼女は顔を輝かせて言った。「自足していて、本当の山人たちよ、分かるでしょう」。「君は

かれらの仲間だという感じをもっているのかね」訝しげに夫は訊いて来た。二人は静かに夕食を取ったが、パットはその日のことを楽しく回想しながら、旺盛な食欲を満たした。一方デイビッドはスープをすすっていたが、構ってもらえない病人のように惨めだった。「ここはインドのほかの地域とは大違いよ、デーブ。ほっとするわ、あのひどいインドからの素敵なエスケープよ」。「都会で見る人々は最低よ、でもここの人たちはちゃんとしていて、誠実で、自立しているわ。ここにいると仏教徒になった感じがするのよ、ヒンズー教徒とはまるで違うわ、この安らぎは仏教を信仰する彼らのもたらす何かだわ、きっと」。デイビッドが口を挟んできた。「パット、パット。君は混乱しているんだよ、どうしようもなく混乱しているのだ。ああ、僕の取り乱した妻、パット」。「どういう意味なの？」「どういう意味だって。君が座っていたのはヒンズー教の寺院なんだ。なのに君はそこを活力と安らぎをもたらす仏教の寺院だと思い込んでいる。誤解しているんだよ、分からないのか、それが」。デイビッドは彼女の変化に気づいていた。重い荷物も軽々と運べる山の女に変身していく彼女は、彼の妻としてはふさわしくなかった。

もうはっきりしていた、二人の間には何の共通点もないことが。彼女はヒッピーたちとも交際を始めた。彼は帰宅した彼女をあれこれと詰問し始めたが、彼女は昼間の疲れですぐベッドに入った。部屋の空気は辛く、酸味をおびていた。彼は乱暴に窓を開けた、彼女が目をさますのを期待して。だが無駄だった。

「次の月曜日にデリーに戻って、調査をしたい。これ以上こんな山奥に滞在するわけにはいかない」。パットはショックを受けた、そんな彼女を見て彼はざまをみろと思った。

出発の朝、彼が風呂からあがると、既に彼女の姿はなかった。彼は航空券の予約をするためにバスの駅へ向かった。「俺たちはここをでるんだ」と彼は村人たちに言い放った。

バスがボンネットから蒸気を放っていた。運転手の助手の少年が水差しを運んできた、運転手はそれをもぎ取って、いぶかしげに見入っているデイビッドをよそ目に一気に熱くなっているラジエーターに水をぶっ掛けた。ラジエーターは爆発した。デイビッドは沸騰した湯を全身に浴びた。苦痛にもがきながら彼

は罵倒した。「目をやられた。こんなときパットの奴はどこにいるんだ、あの役立たずの妻は」。その後、彼はホーリーファミリーホスピタルでアメリカ人ドクターの治療を受けた。幸いにも失明することはなかった。

ホテルに戻った彼を見て「一体全体どうしたの？　何があったの、デーブ？」といって笑い転げるパット。彼女はナソギの共同体で生活をともにすることに決めたといった。もう二度と彼とパーティーに行くつもりなんかない、信条をシェアーするほかの男女と共同生活を営むと。「僕は社交好きでパーティーが好きなだけの男じゃない、僕の一生を左右する社会学の論文を真剣に手がけているじゃないか、違うか？」「社会学ですって、社会学やっているのに、あなたったら自分のすぐ隣の人の心さへ覗いてみようとはしなかったわ」。「ヒンズー教の寺院でも仏陀を見出すことはできるのよ。教会でも、森でも、どこででもね、その気になりさえすれば。仏陀はあなたのように偏狭だと思っているの？」

その晩のホテルはアメリカ英語での罵倒、非難、罵り合いで充満した。パットは月明かりを浴びながら、出て行った。デリーに到着したデイビッドは、絵の具を塗ったような痣(あざ)のあるヒヒのようなひどい自分の顔よりもそばに妻がいないことを後悔していた。

Salmam Rushdie (b. 1947)
"The Prophet's Hair" (1981)

＜作者紹介＞

過去50年間においてインド出身の作家の中で最も影響力を持った作家はアーメッド・サルマン・ラシュディーであり、その魔術の物語、歴史の流れの中での人間の苦悩とバイタリティーを扱うダイナミックな語りは、今日のインド文芸ルネサンスの開花に貢献してきた。1947年のインド亜大陸の分割の２か月前にボンベイで生まれボンベイのキャセドラルスクール、ワーウィックシャーのラグビースクール、そしてケンブリッジのキングズカレッジで教育を受けたあと、ラシュディーはイギリスに定住し、1970－80年の間俳優としてまたフリーのコピーライターとして働いていた。

彼の２作目『真夜中の子供たち』はベストセラーとなった。1988年に、ラシュディーは魔術リアリストとしてではなく、本当の意味で政治的・歴史的嵐のなかに巻き込まれた。彼の小説『悪魔の詩』がイランのイスラム教長老たちによってイスラム教の創設者である預言者ムハンマドを冒涜するものであると断定され、ファトワー（死罪）が下された。その結果、彼はイギリスの秘密情報員によって匿われることになった。1998年にイギリス政府の尽力で彼に対するファトワーが解除され、ラシュディーは再び公的な場に姿を現すようになったが、その身は絶えず危険にさらされている。

＜梗概＞

「預言者の遺髪」（1981）は『千夜一夜物語』の伝統に準拠した道徳的寓話であり、マジック・リアリズムの狂騒的音楽劇であり、そして出来事、詩的詳述（「夜の冷たさが野生の蜂蜜の曇りがかった安定を湖水に与えていた」）、ユーモアが超スピードで織りめぐらされている短編である。

19 —— 年の早々、カシミール州の首都スリナガルは骨身を砕くほどの極寒に襲われていた。若者が霜のように大地に横たわっていた。その名はアッタで、彼は最も信頼に値する強盗を探していたが、その報酬にと持参した銀行預金口座をお目当ての強盗のところまで案内すると申し出てきた二人の男に奪われた上、瀕死の暴行を加えられた。

彼はほかの男たちによって運河の人気のない堤防に置き去りにされた。翌朝花売りの男が重傷をおったアッタを見つけ、法外な報酬を期待しながら彼をボートに乗せてダル湖のほとりにある屋敷へ運んで行った。屋敷では美しいが体中傷ついた若い娘と困り果てたこれまた美貌の母親が（一睡もしていないことが、二人の目でわかったのだが）、アッタの哀れな姿を見て悲鳴を上げた。花売りは期待通りの報酬をもらい固く口止めされて姿を消した。アッタは昏睡状態に陥っており、この町の名医たちはなす術がなく両肩をすくめた。翌晩町でも最も悪名高い地区から２番目の訪問客が来た。アッタの妹フマであり、彼同様に低い、厳粛な口調で同じ質問をするのであった。「どこで泥棒を雇えるのでしょうか？」

腕や額にある無数のこぶや傷跡のあるフマは集まった民衆の前で言った。

「私は一文無しです。父に勘当されたからです。ですから私が万一誘拐されても父は決して身代金を出さないはずです。ですから警察副署長である叔父さんに手紙を託してあるのです。万が一誘拐されたらその手紙を叔父さんは開封し、私の消息に関する情報を得て、とことん犯人を捜索することになっているのです」。集まった人々の中には副署長である叔父さんの保護を求めるのに、泥棒をわざわざ雇うというのはおかしな話だと指摘する者もいた。

フマは兄同様暗い小路を抜けて老人の案内で進んでいったが、突然向こうずねをいやというほど打たれた。正気に戻ったフマに老人は「泥棒のなかの泥棒と呼ばれるシェイク・シン」を屋敷に派遣するという約束をする。

フマはこれまでの経緯を老人に説明する。6日前までは裕福な金貸しの父ハシムと一緒に住む自分の家は平穏そのものだった。朝食後、父はシカラに乗って借金の取立てに出かけようとしたが、シカラと彼の桟橋の間に浮かんでいる銀色の小瓶を目にした。彼はそれを拾い上げ、予定を変更して自分の部屋に戻った。その小瓶のなかには有名な預言者ムハンマドの遺髪が入っていた。前日にハズラトバル・モスクから盗み出されたものだった。大掛かりな警察の捜索にパニック状態に陥った泥棒たちがその小瓶をダル湖に投げこんだに違いなかった。ハシムは「ムハンマドは偶像化されることを極端に嫌悪していた。だから、モスクに保管して信者たちの偶像崇拝の対象とするよりも、私が保管したほうが預言者のためになる。つまり、私は遺髪ではなくて銀の小瓶が欲しいだけなのだ」と自分を納得させた。

夕食のとき、朝のハプニングのために依然として混乱していたたハシムは家族の前で愛人がいること買春をしていることを告白する。彼は妻にイスラム法で取り決められている額の遺産を与えることを明言する。また、彼は間抜けな息子アッタを罵倒する。またベールをかぶらずに、顔をむき出しにして町を歩いた娘も非難し、お前のようなやつは男子禁制のパーダーに入るべきだと激しく叱った。

4日目になってアッタは父の留守中に金庫から小瓶を盗み出して妹のフマにこう言うのだった。「この小瓶が我が家からなくならない限り、我が家に平安はない。この小瓶をモスクに返してくる」と。しかしその小瓶は彼のズボンの

ポケットの穴から湖に落ち、それをハシムが再度見つける。帰宅したハシムはフマをさんざん殴る。それを聞いてアッタは遣髪は家族を苦難に追い込むために戻ってきたと嘆くのであった。

フマは老人に父は寝るとき必ず枕の下に小瓶を置いて寝ると説明し、父が寝返りを打つとき簡単に小瓶は手に入ると説明する。「もし小瓶を手に入れたら私の部屋に来てください。そしたら母と私がもっている宝石をお礼として全部上げましょう」。「今晩、今晩必ず来てください」。娘が帰った後、老泥棒は咳き込んで、血を吐いた。病みつきとなった賭博癖が彼を万年貧乏にしていた。今度の盗みを成功させて裕福になり、まともな死を迎えたいと望んでいた。彼の妻は盲目で、４名の子供たちは出生時に身障者にし、乞食となって一生高収入をえられるようにと配慮していた。実際、子供たちの収入は抜群であった。

ハシムの寝室に入ったシンは一歩、また一歩と目当ての小瓶に接近していった。その瞬間に隣の部屋で寝ていたアッタが突然直座して大声で「泥棒、泥棒、泥棒」と叫びそのまま息絶えた。息子の叫び声に目を覚ましたハシムはベッドの横に置いてある剣を取って廊下に出たが、暗闇のなかでベッドの反対側にいたシンは小瓶を手に入れて窓から逃げた。暗闇のなかから影が現れたので、ハシムは泥棒だと思い込み切りつけたが、実は娘のフマであった。絶望的な悔恨の念に駆られて彼は娘を殺した剣で自害する。その後、妻は度重なる突然の家族の悲劇にショックを受け発狂し精神病院に入れられた。

武装警官を多数率いてフマの叔父である副署長が殺人犯捜索に駆けつける。泥棒のシンは屋根裏部屋から屋根へ逃れエスケープを試みるが、副署長の銃弾で撃たれてしまい地上に落下する。

小瓶の回収はラジオで全国に放送された。シンの４名の息子たちは父が死んだ朝に目覚めて奇跡が起きたことを知った。五体健全となっていたのだ。彼らは健全となった自分の肉体を呪った。というのも収入が75％も減ったからだ。泥棒の妻だけが喜んでいた。視力が回復し、カシミールの美しい渓谷を眺めながら最後の日々を幸せに過ごせるようになったからだ。

参考文献

C・ブロンテ　『ジェイン・エア』　大久保康夫訳　東京：新潮文庫, 1954.

Desai, Anita. "Scholar and Gypsy." *Norton Anthology of English Listerature.* Ed. M. H. Abrams et al. 7th ed. 2 vols. New York: Norton, 2000. 2: 2768-85.

正木恒夫　「『ジェイン・エア』から『インドへの道』へ」『多文化主義で読む英米文学　あたらしいイズムによる文学の理解』木下　卓他編著　東京：ミネルヴァ書房, 1999. 90-106.

中村邦生他　『たのしく読めるイギリス文学』　東京：ミネルヴァ書房, 1994.

Rushdie, Salman. "The Prophet's Hair." *Norton Anthology of English Listerature.* Ed. M. H. Abrams et al. 7th ed. 2 vols. New York: Norton, 2000. 2: 2842-52.

*SparkNotes : JaneEyre.*http://www.sparknotes.com/lit/janeeyre/summary.html

鈴木幸夫編　『世界文学鑑賞辞典：イギリス・アメリカ』　東京：東京堂出版, 1962.

インド略史

1492　イタリア人コロンブスは、地理学者トスカネリの説を信じて、大西洋を西に航海すれば、東洋に到達できると確信し、スペイン女王イサベラの援助のもとに、72日間の航海の末サン・サルバドル島に到達した。

1498　ポルトガル人バスコ・ダガマがイスラム教徒の案内でカルカッタに到着し、インド航路発見。

1519　ポルトガル人マゼランによる３年がかりの世界一周航海。

1526　ムガル帝国成立。

16世紀後半　ヨーロッパの国々は貿易による富を求めてアジア進出開始。特にインドでは綿花や茶、香辛料などが豊富だったので多くの国が進出した。

1600　エリザベス女王のもとでイギリス東インド会社設立。

1602　オランダ東インド会社設立。

1604　アンリ四世のもとでフランス東インド会社設立。

1757　フランス東インド会社がベンガル太守の軍隊の援助のもと、イギリスをカルカッタから撃退する。クライブ率いるセポイ軍がプラッシーでフランス軍とベンガル太守軍を破る。その後、フランスはインド進出を諦め、インドシナへ進出。またオランダもインドから手を引き、インドネシア進出。

イギリスはムガル帝国に対して、武力を盾に徴税権を容認させる。納税できないインド人から土地を収奪する。

産業革命の進んだイギリスでは蒸気機関の発達によって、大型機械による綿布の大量生産が行われる。

19世紀中盤　イギリスはインドの大部分を植民地化する。

中部インドでは、イギリス軍がヒンズー諸侯が連合したマラータ同盟を撃破し、南部インドでは、イスラム教徒のマイソール王国を打ち破る。

イギリスの植民地戦争は、インド支配のために17世紀に建設した。マドラス、ボンベイ、カルカッタの３都市を拠点として行われた。

イギリスから輸入された大量生産の安価な綿布のためインドの綿産業は

衰退する。世界一の織物の町として知られていたダッカではほとんどの織物業者や職人が失業した。一方、イギリスは世界の工場としてますます繁栄。

1847　シャーロッテ・ブロンテ『ジェイン・エア』

1850　インドでの産物生産を増やすために、ボンベイから内部へむかう鉄道建設が開始された。

1851　第1回万国博覧会がロンドンで開催される。

1857　北インドの町デリーでイギリスの植民地支配に対して東インド会社のベンガル地方のインド人傭兵であるセポイの乱勃発。これをきっかけにムガル皇帝もたちあがり、インド各地で独立運動が起きたが、本国から派遣されたイギリス軍に敗れた。ムガル皇帝はビルマ追放処分。

1858　ムガル帝国滅亡。イギリス直接統治開始。

1869　ガンジーがインド西部のポルバンダルの豪農家で生まれる。

1877　東インド会社解散、インド帝国をつくり、ビクトリア女王がその皇帝となる。その結果インドは完全にイギリスの植民地となった。

1885　インドの弁護士、医師、教師などの知識人がインド国民会議を結成する。この組織は当初はイギリスの植民地として、インドの地位向上を目指したが、後にはインドの独立を求めた。

1888　19歳になったガンジーは、妻子をインドに残し、弁護士資格を得るためにロンドン大学へ留学する。

1891　ガンジー弁護士資格を取得しインドへ帰国。

1893　ガンジーが24歳のとき、当時イギリスの植民地だった南アフリカのダーバンへ派遣される。白人が支配していた南アフリカでは、黒人やインド人が激しい人種差別を受けていた。

ガンジー、非暴力と不服従で人種差別と戦うことを南ア在のインド人に呼びかける。

1901　ルドゥヤード・キプリング『キム』

1905　日本が日露戦争で勝利した結果、アジアの国々では独立を求める民族運動が活発になる。

インド総督はベンガル東西分割令を出し、イスラム教徒とヒンズー教徒を対立させ民族運動を弱体化させようとした。

1906 インド国民会議は、カルカッタで大会を開催し、ベンガル分割令に反対し、全国的な反イギリス運動を開始する。この後、インドの民族運動は「国産品を愛用しよう」（スワデーシ）と「自治を勝ちとろう」（スワラージ）を二大運動目標とした。

一方、南アフリカでは、ガンジーが中心となってインド人協会を設立し、インド人の生活向上や職業訓練を目指す運動を開始。また彼は、この運動で政府に逮捕された者の家族を集め、自給自足を目指すトルストイ農場を始める。

1913 ガンジーの率いる運動によって、南アフリカ政府はインド人に対する徴税差別を撤廃。

1914 第一次世界大戦勃発し、インドも多数の兵士をヨーロッパ戦線へ派遣した。

1915 ガンジー48歳のときにインドへ帰国。国民会議とともにインド独立のために戦う意を固める。

1916 ガンジーは27歳になる優秀な若者ネルー（1889～1964）と出会う。

大戦で苦戦を強いられているイギリスは、インド総督を通じて対戦終結後のインドの独立を条件にインドに対して更なる戦争協力を要請する。

インドの独立と自治に望みをかけてインドは100万人以上の兵士を戦場に派遣した。

1918 11月、ドイツの降伏によって大戦終結。しかしイギリスはインドの独立を認めなった。

1919 ３月、インドの独立運動を弾圧するためにローラット法が公布される。

ガンジーは、それに反対して4月に全国民にジェネラルストライキに参加するよう呼びかけ実行した。

４月13日、インド北西部の町アムリッツァーで、ローラット法実施に対する抗議集会が開催され１万人以上の人が参加。イギリス軍はこの集会に対して無差別攻撃を行い、370人が射殺され、1000人以上もの人々が

負傷した。これはアムリッツァー虐殺事件と呼ばれる。

1920　ガンジーは国民会議派大会で国産品愛用と非暴力不服従を合言葉にしてあくまでイギリスと戦うことを提案し、同意を得る。イギリスからの綿織物の不買運動を展開し、伝統的なチャカでの綿布生産を推進する。

1922　イギリスに反抗したという理由で逮捕された53歳のガンジーは獄中でもチャルカで糸を紡ぎ、根気よく戦う。

1924　E. M. フォースター『インドへの道』

1929　ネルーが国民会議派の指導者になり、ガンジーは民衆とともに運動を続ける。

1930　塩を専売しているインド政府に抗議するため塩の行進を実施。26日間かけて360キロを歩き続けたガンジーは海岸に到着し塩を作った。投獄されたガンジーは断食を断行し、政府への抗議を続行した。多数のインド人も断食に参加した。政府は遂にガンジーを釈放し、塩の専売を廃止した。

1931　ロンドンでインドの独立についてのイギリス・インド円卓会議開催。

1935　イギリスがインドの自治を認める。しかしインドがいずれ独立することが確実になるとヒンズー教徒とイスラム教徒の争いが急に激化した。インドが独立すれば、国民会議派が政権を握り、その指導者のネルーが首相になることは確実だった。国民会議派のほとんどはヒンズー教徒で、少数派のイスラム教徒は、多数派のヒンズー教徒に支配されてしまうという危機感を抱いていた。

1947　8月、インド独立。しかしこのときインドはヒンズー教徒の多いインドとイスラム教徒の多いパキスタンの二国に分かれてしまう。

10月、カシミールの帰属をめぐり第1次印パ戦争、49年停戦。

1948　狂信的なヒンズー教徒の青年によってマハトマ・ガンジーは暗殺される。ガンジーの葬儀でネルー首相は「ガンジーさんが常に言われていたことを思いだそう。恐れと憎しみを忘れよう。暴力や殺し合いことをやめて、わがインドの自由を守ろう」と追悼演説を行った。

1950　憲法を公布し共和国になる。独立後はネルー首相の下で非同盟外交と社

会主義的な経済政策を推進する。

1962　中国との国境紛争

1965　第２次印パ戦争

1966　ネルーの長女インディラ・ガンジーが首相就任。

1971　第３次印パ戦争

1972　シムラ協定締結。これには両国の間の懸案は「二国間交渉もしくは両国の合意するその他の平和的手段によって」平和裏に解決すべきことが規定されている。

1974　初の核実験成功

1975　ガンジー首相選挙違反で有罪判決。政府は非常事態を宣言。

1977　総選挙でガンジー派国民会議派が大敗、デサイ政権発足。

1978　アニタ・ディサイ「学者とジプシー」

1980　総選挙で会議派が圧勝し、ガンジーが政権復帰。

1981　サルマン・ラシュディー「預言者の遺髪」

1982　パンジャブ州で独立国家樹立を主張するシーク教徒過激派の武装闘争が激化。

1984　ガンジー政権はシーク教本山の制圧作戦を実施、立てこもっていた約600人が死亡。シーク教徒の警備隊員が首相を射殺。12月総選挙で会議派が大勝し、元首相の長男ラジブ・ガンジーが首相就任。

1989　第２党ジャナタ・ダルのV. P.シンを首班とする少数与党政権成立。

1990　会議派の閣外支持でチャンドラ・シェカール政権成立。

1991　ガンジー首相は遊説中に爆弾テロで死亡。会議派は総選挙で議席を増やし６月ナラシマ・ラオ政権が発足。ラオ政権は独立以来の社会主義型の統制経済から、外資の積極的な導入、規制緩和、自由化を軸とした経済改革を推進し、経済は好転した。

1996　総選挙で会議派は歴史的大敗を喫した。会議派の閣外協力を得て中道・左派と地域政党で構成する「統一戦線」のデーベ・ゴウダを首班とする連立政権が成立。

1998　３月、バジパイ首班の少数連立内閣が発足。バジパイは提携政党との共

通の政策綱領として (1) 核兵器導入の選択肢の行使 (2) 外資の選別的導入 (3) 国内産業優遇による失業撲滅などの『国民政策合意』を発表。
5月、24年ぶりに地下核実験を実施。

1999 第3次バジダイ政権発足。